

Paradise Lost における essence の意味

—— 語源的観点から ——

野 村 宗 央

松 山 大 学
言語文化研究 第41巻第2号 (抜刷)
2022年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 41 No. 2 March 2022

Paradise Lost における essence の意味

—— 語源的観点から ——¹⁾

野 村 宗 央

1. は じ め に

John Milton (1608-74) は、*Paradise Lost* (1667) において事物の存在をどのように捉えているのか。ここでいう「存在」とは、essence (～である：本質存在) と existence (～がある：現実存在, 事実存在) の意味での存在である。²⁾ 例えば、*Paradise Lost* では existence という言葉は直接的に用いられておらず、*Lexicon to the English Poetical Works of John Milton*³⁾ (以下 *Lexicon*) によれば、being, darkness, essence, life, nothing などが existence の代替表現として用いられているのが分かる。一方 essence の見出しには、“*sb. (a) being that has existence, entity*” の意味で一例 (“all this mighty host / In horrible destruction laid thus low, / As far as gods and heavenly essences / Can perish.” (1. 136-39)), そして “(*b) constituent substance*” の意味で四例 (“their essence pure” (1. 425), “Our purer essence” (2. 215), “bright essence increate” (3. 6), “[I . . . am now constrained / Into a beast, and mixed with bestial slime, /] This essence to incarnate and imbrute. . . .” (9. 166)) の記載がある。また essential の見出しには、“*sb. (a) being, essence, substance*” の意味で一例 (“and reduce / To nothing this essential” (2. 96-97)) の

1) 本稿で挙げる引用等の出典の記載については、ジョゼフ・ジバルディ『MLA 英語論文の手引 (第6版)』樋口昌幸訳編 (東京：北星堂, 2005) 補遺 B に準拠する。

2) 須田朗「存在」『哲学キーワード事典』(東京：新書館, 2004) 342. 参照。

3) Laura E. Lockwood, *Lexicon to the English Poetical Works of John Milton* (London: The Macmillan Company, 1907).

記載がある⁴⁾。このように、existence と essence の使用の観点から見て特徴的なのは、existence そのものは用いられず、being などの単語に代替されていること、そして essence に関しては、その定義は二つ、用例としては計五例にとどまっていることである。

興味深いのは、essence がほぼ existence の意味で用いられる “*sb. (a) being that has existence, entity*” の定義である。Lexicon の挙げる箇所を見てみたい。なお *The Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) では、essence の定義 “2. a. *concr.* Something that *is*; an existence, entity. Now restricted to spiritual or immaterial entities.”⁵⁾ において、同箇所からの用例がある。

and all this mighty host

In horrible destruction laid thus low,
As far as gods and heavenly essences
Can perish. . . .⁶⁾ (1. 136-39)

Lexicon と *OED* の定義通りに解釈すれば、Milton はここで、地獄へと落とされた墮落天使達のうち、“heavenly essences” を「天の各々の存在者達」と描写していることになり⁷⁾、従って essence を「～である」というよりも「～がある」の意味での存在として捉えていることになる。また、上に挙げた essential の定義

4) 他の見出しとそれぞれの意味は以下の通り。Fire: “the essence of angels” (“Cherubic waving fires” (6. 413)), Quintessence: “the ‘fifth essence,’ as distinguished from the four elements, earth, water, air, and fire” (“this ethereal quintessence of heaven” (3. 716), “light / Ethereal, first of things, quintessence pure / Sprung from the deep” (7. 243-45)), Spirit: “(5) a simple essence devoid of matter and possessed of the power of knowing, willing, acting” (“Till body up to spirit work” (5. 478), “Your bodies may at last turn all to spirit. . . .” (5. 497), “forth rushed with whirlwind sound / The chariot of paternal deity, / Flashing thick flames, wheel within wheel undrawn, / Itself instinct with spirit, but convoyed / By four cherubic shapes. . . .” (6. 749-53), “for within them spirit lived. . . .” (7. 204)).

5) “essence,” *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., CD-ROM (Oxford: Oxford UP, 1992).

6) Alastair Fowler, ed., *Paradise Lost*, 2nd ed. (Edinburgh Gate: Pearson Longman, 2007). 以降 *Paradise Lost* からの引用は本書による。

“*sb. (a) being, essence, substance*” について、*OED* は “**B. n. † I. What exists; existence, being. Obs.**”⁸⁾ と定義づけ、*Lexicon* と同箇所を用例に挙げている。

What fear we then? what doubt we to incense
 His utmost ire? which to the height enraged,
 Will either quite consume us, and reduce
 To nothing this essential, happier far
 Than miserable to have eternal being:
 Or if our substance be indeed divine,
 And cannot cease to be, we are at worst
 On this side nothing. . . (2. 94-101)

Alastair Fowler 他⁹⁾ の指摘通り、本箇所の “essential” は essence の意味で捉えるべきであると考えますが、*OED* に従えば、ここでも Milton は essential (= essence) を existence の意味で用いていることになる。また、ここで “substance” という存在を示す言葉が用いられていることも注目に値する。というのも、*OED* によれば、essence は、その語源をギリシア語の οὐσία (英語でいう being) に持ち、その οὐσία^{ウーシア} に倣ったラテン語の essentia に由来するとしているが、この οὐσία^{ウーシア} は Aristotle (384-322 BC) の存在論の中心概念であり、英語では substance、日本語では「実体」と訳されるのが一般的だからである。

7) Milton は、その後異教の神々になる “gods” とその他の “heavenly essences” を分けていると思われる。“Milton, along with many other interpreters, took Genesis 3.5 (“Ye shall be as gods”) very literally: pagan idols (and their prototypes, the fallen angels) can be described as “gods,” since they will someday be worshiped by idolaters.” Roy Flannagan, ed., *Riverside Milton* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1998) 358.

8) “essential,” *The Oxford English Dictionary*.

9) Fowler, *Paradise Lost* 114.; Masaru Shigeno, notes, *Paradise Lost* (Tokyo: Kenkyusha, 1926) 419.; Merrit Y. Hughes, ed., *Complete Poems and Major Prose* (Indianapolis: Hackett Publishing Company, 1957) 234.; Masao Hirai, ed., *Paradise Lost (Books I-II)* (Tokyo: Kenkyusha, 1984) 125.

William B. Hunter は、substance と essence の考えにおいて、Milton のキリスト教教義が、Aristotle の哲学的定義と一致していると述べているが¹⁰⁾ このことから、^{ウーシアー} οὐσία にまつわる Aristotle の存在論を概観する必要があると考えられる。そこで、本稿では、essence および substance の意味を Aristotle の ^{ウーシアー} οὐσία に遡って確認し、Hunter の分析と照らし合わせることで、*Paradise Lost* において、Milton がいかなる意味でそれらの語を使用しているか、その一端を明らかにすることを目的とする。手順として、まず Aristotle の存在に関する用語、具体的には上記の ^{ウーシアー} οὐσία、および「その物の種類を示すような形」¹¹⁾ を表すとされる ^{エイドス} εἶδος それぞれの意味を整理する¹²⁾。そして、それらの意味を踏まえ、*Paradise Lost* における使用例について改めて考察する。

2. 言葉の定義—— Aristotle から ——

まず、Aristotle の存在論における主要概念 ^{ウーシアー} οὐσία について見てみよう。次の表 1 は、*Metaphysics* における ^{ウーシアー} οὐσία の訳語対照表である¹³⁾

表 1 ^{ウーシアー} οὐσία の訳語

	ギリシア語	ラテン語	英語	日本語
(1)	^{ウーシアー} οὐσία [本質存在]	substantia	substance	実体

10) William B. Hunter, “Further Definitions: Milton’s Theological Vocabulary,” *Bright Essence: Studies in Milton’s Theology* (Salt Lake City: U of Utah P, 1973) 23.

11) 山口裕之『語源から哲学がわかる事典』（東京：日本実業出版社、2019）98-99. 参照。

12) Aristotle の著作からの引用は主に和訳からおこなうが、必要に応じて以下に挙げるギリシア語原文と英訳を角括弧で示す。原文：Aristotle, *Aristotle’s Metaphysics*, Vol. 1 (Oxford: The Clarendon Press, 1924). 英訳：E. M. Edghill, trans. “Categories,” *Aristotle: The Complete Works* (Adelaide: eBooks@Adelaide, 2007), Kindle.; W. D. Ross, trans. “Metaphysics,” *Aristotle: The Complete Works* (Adelaide: eBooks@Adelaide, 2007), Kindle.

13) 出隆訳注『形而上学 上』（東京：岩波書店、1959）365. 参照。以降 *Metaphysics*（『形而上学 上』）からの引用は本書を用い、頁数を引用文の後に丸括弧で示す。

(2)	ウーシアー ヒュボケイメノン οὐσία (ὕποκειμενον) [基に措定されたもの] ¹⁴⁾	substratum / subiectum	substratum / subject	基体/ 主語
(3)	ウーシアー ト・ティ・エーン・エイナイ οὐσία (τὸ τί ἦν εἶναι)	essentia / quod quid erat esse	essence	本質/ なにであるか [本質]

一般的に、(1) “οὐσία は英語で “substance”, 日本語では「実体」と訳され、特に(2) “ὕποκειμενον” を意味する場合には “substratum” (基体), また論理学・文法的には “subject” (主語) と訳される。また(3) “τὸ τί ἦν εἶναι” を意味する場合には、その意識であるラテン語の “essentia” から英語の “essence” を経由し「本質」と訳されるが、τὸ τί ἦν εἶναι の逐語訳 (“quod quid erat esse” (≒ what to be what it was)¹⁵⁾) に焦点を絞り、「なにであるか [本質]」¹⁶⁾ と表記される場合もある。以上を踏まえた上で、οὐσία は英語では substance, 日本語では「実体」と訳されることが通例となっている¹⁷⁾

しかしながら、οὐσία はあくまでこれら三つの意味を包括する言葉である。中畑正志によれば、οὐσία は「[ある] という動詞 (εἶναι) [英語における be]

14) ὕποκειμενον について、従来は「何かが「そのうちにあるもの」としては「基体」, 「何かが「それについて語られるもの」としては「主語」と訳されてきたが、「アリストテレスは明らかに同一の概念を表す言葉として「ヒュボケイメノン」を使用しており訳語が分かれることは望ましくない」と中畑は言う。そして「ヒュボケイメノンとは、ある議論ないし理論において何かを述べたり規定したりするときとその前提とされているものであり、そのような意味で、「基に措かれている」当のものであるということになるだろう」と述べ、ὕποκειμενον の訳語に「基に措定されたもの」を当てている。中畑正志訳注『カテゴリー論』アリストテレス全集 1 (東京: 岩波書店, 2013) 14, 90. 参照。以降 *Categories* (『カテゴリー論』) からの引用は本書を用い、頁数を引用文の後に丸括弧で示す。

15) quod quid erat esse の訳については、以下を参照のこと。「“what to be what it was”: 「それは何だったのか」とはどういうことか」山口 121. 「まさにそれであったあるもの」, 「そもそもなにであるか」出隆『アリストテレス哲学入門』岩波オンデマンドブックス (東京: 岩波書店, 2018) 153. 参照。また Walter J. Ong, S. J. and Charles J. Ermatinger は、Milton が *Art of Logic* において実際に用いる “quod quid est esse” を “the what (really, enduringly) is” と訳している。Walter J. Ong, S. J. and Charles J. Ermatinger, ed. and trans., “A Fuller Course in the Art of Logic,” *Complete Prose Works of John Milton*, vol.8 (New Haven: Yale UP, 1982) 232. 参照。

16) 出注『形而上学 上』320-21. 参照。

17) 丸井浩「実体」『岩波 哲学・思想事典』(東京: 岩波書店, 1998) 671. 参照。

を、その現在分詞の女性形 (^{ウーサ}οὐσα) から名詞化したもの¹⁸⁾ であり、「[「ある」という動詞との関係、とりわけ「まさに～である」という意味やその意味と結びついた「何であるか」に答えるもの]¹⁹⁾ こそ、Aristotle が ^{ウーシア}οὐσία によって主に表現しようとした意味であるとしている。それ故に「[「まさに～であること」あるいは「何であるか」との関係性を「本質」という言葉によって示し、同時に「ある」ということの方の意味である「存在」を組み合わせて「本質存在」]²⁰⁾ という訳語を当てている。また、「[本質」は現在では *essence* という言葉の訳語として使用されるが、初期のラテン語訳では、「ウーシア」は、*substantia* ではなく、ギリシア語により忠実に、動詞「ある」(*esse*) から派生した *essentia* というラテン語に訳されていた²¹⁾ のであり、これについては Hunter も同様の指摘をしている²²⁾ このように語源的観点から見た場合、(3) *essence* が、^{ウーシア}οὐσία 本来の意味を一層示していると言える。

Categories に目を向けると、^{ウーシア}οὐσία は第一のウーシア [primary substances] と第二のウーシア [secondary substances] に区分され、前者は「最も本来的でかつ第一義的そして最もすぐれた意味で、まさにそれであるもの(本質存在) [従来の「実体」、希 ^{ウーシア}οὐσία, 英 substance]」(20) であり、また「ある何らかの基に措定されたもの [従来の「基体」、希 ^{ヒュボケイメノン}ὑποκείμενον, 英 subject] について語られるのでもなく、ある基に措定されたものうちにあるのでもない、という条件を満たすもの」(20) を指すとし、例として「特定のある人間 [the individual man]」(20) などの「個体」²³⁾ が挙げられている。一方後者は、そういった特定のある人間が「そのうちに帰属する〈種〉 [species]、およびそのような〈種〉を包括する〈類〉 [genus]」(20) を意味し、「たとえば、特定のある人間は、

18) 中畑注 95.

19) 中畑注 97.

20) 中畑注 97.

21) 中畑注 98.

22) “Unfortunately for clarity, *hypo-stasis* by etymology is the Greek equivalent for Latin *substantia* or *sub-sistentia*, whereas *essentia* is akin to Greek *ousia*.” Hunter, 16.

人間という〈種〉に帰属し、他方で人間という〈種〉の属する〈類〉は動物(20)であり、この第二のウーシアーとしての種および類が、個体の「なにであるか〔本質〕」を表すとされている²⁴⁾。このように、^{ウーシアー}οὐσία は大きく分けて二つの意味を含んだ概念であり、一つは(1)「実体」すなわち、「特定のある人間」などの「個体」、および(2)「基体」や文法上の「主語」を意味し、もう一つはその「個体」の(3)「なにであるか〔本質〕」を表している。そして、それらの意味によって、英語・日本語では substance (実体), substratum / subject (基体 / 主語), essence (本質) といった表記が使い分けられていると言える。

他方 *Metaphysics* では、表 2 のように、^{ウーシアー}οὐσία は大きく二つに分類されている。

表 2 ^{ウーシアー} *Metaphysics* における οὐσία [substance] の分類

(4)	もはや他のいかなる基体〔主語〕〔希 ^{ヒュボケイメノン} ὑποκειμενον, 英 subject〕の述語ともなりえない窮極の基体〔個体〕〔希 ^{ヒュボケイメノン} ὑποκειμενον, 英 substratum〕	① 単純物体〔自然物〕
(5)	これと指し示されうる存在であり且つ離れて存しうるもの…すなわち各々のものの形式または形相〔希 ^{モルフェー} ἡ μορφή καὶ τὸ εἶδος, 英 the shape or form〕	② 靈魂〔生命原理〕 ③ 面, 線, 数 ④ もののなにであるか〔本質〕〔希 ^{トチイユン} τὸ τί ἦν εἶναι, 英 essence〕, および定義

まず Aristotle は、(4)①「単純物体〔自然物〕²⁵⁾」(175)、例えば土や火や水などの物体、およびそれら諸物体から構成された生物や神的なものを挙げ、これら

23) 「『特定のある人間』『特定のある馬』と訳されたのは、定冠詞と不定形容詞と一般名詞によって構成される人工的表現（英語で言えば、the + some + horse）であり、訳語も意図的にこの人工的性格を反映させている（通常の語順である「ある特定の」としなかったのも、そのためである）。すなわち、この表現は、「一般名詞が表現するもの（人間）に属する任意のもの」としての「当のもの」ないし「特定のものを」表現すると理解される。したがって「特定のある人間」は、人間という〈種〉に属する任意のものとしての特定の人間を指すことになる。たんにいわゆる個体を指すための表現ではないことに、注意すべきである」中畑注 21.

24) 「種が個体の本質であるが、その種の本質はさらに「何であるか」に答える定義によって与えられる。定義は類と種差による」水田英美「本質」『岩波 哲学・思想事典』1507.

を「もはや他のいかなる基体〔主語〕〔希 ^{ヒュボケイメノン} ὑποκείμενον, 英 subject〕の述語ともなりえない窮極の基体〔個物〕〔希 ^{ヒュボケイメノン} ὑποκείμενον, 英 substratum〕〕(176)としての「実体」〔希 ^{ウーシア} οὐσία, 英 substance〕(176)であるとしている。これは *Categories* でいえば、表1(1), (2)に相当する意味である。次に(5)生物に内在する②「靈魂〔生命原理〕」(175)や、諸実体の部分として内在し、限定して指し示されるもの、例えば物体にとっての③「面」(176)、面にとっての「線」(176)といった全体に対する部分、および「数」(176)、さらに④「もののなにであるか〔本質〕」〔希 ^{ト・ティ・エーン・エイナイ} τὸ τί ἦν εἶναι, 英 essence〕(176)といった三つ(②~④)もまた「実体」〔希 ^{ウーシア} οὐσία, 英 substance〕であり、これを要して「これと指し示されうる存在であり且つ離れて存しうるもの…すなわち各々のものの形式または形相」〔希 ^{モルフエー} εἶδος〕(176)としている。

form (形相) は Aristotle の四原因説の一つである「形相因」として知られており、その語源の意味は表3に示す通りである。

表3 formの語源の意味

ギリシア語	ラテン語	英語	日本語
^{エイドス} εἶδος : その物の種類を示すような形	forma	form	形, 姿, ^{エイドス} 形相
	speciēs	species	種

“form” は主に「形」や「姿」、特にアリストテレス哲学においては「形相」と訳されるが、そのギリシア語源である“^{エイドス}εἶδος”は、動詞の ^{エイド}εἶδω (見る、そのように見える) の名詞形である²⁵⁾ その ^{エイドス}εἶδος の定義には、“*that which is seen*”:

25) 「この第一の意味でのウーシアを、ここでは「自然物」と呼んでおくことにしよう。生物が含まれることからわかるように、ウーシアはたんなる物体ではない。元素でさえも外からの力によって動かされるだけの死せる物体ではなく、本来あるべき場所へ戻ろうとする力を自身のうちにもっているかぎり、むしろ生き物に近い」富松保文『アリストテレス はじめての形而上学』(東京: NHK 出版, 2012) 49.

26) 山口 98. 参照。

form, shape” すなわち「形」や「姿」に加え, “II form, kind, or nature”, “III class, kind” といった「種類」や「性質」という意味があり²⁷⁾ Aristotle の理論においては, εἶδος^{エイドス} 単体で「その物の種類を示すような形」を意味するとされる。また, εἶδος^{エイドス} の「その物の種類を示すような形」という意味は, ラテン語では “forma” と訳され, 英語の “form”, そして日本語の「形」, 「姿」, 「形相」^{エイドス} となった一方で, 「種類」の意味的側面は, ラテン語 (英語) では “speciēs (species)” となり, 日本語では「種」と訳され, 「類 [genus]」と対置されている²⁸⁾。

次に形相を含む四原因の一つである「形相因」について見てみたい。以下の表4は, *Metaphysics* における「形相因」と「質料因」に関する記述 (日本語訳) とその英訳, およびそれぞれの原因の内容である。ここでは, 主に(6)「形相因」について述べる。

表4 形相因と質料因

		内容 (第一巻 (A巻) 第三章, 第五巻 (Δ巻) 第二章)
(6) 形相因	物事の実体でありな ^{ウーシア} に ^{ト・テイ・ユーン・エイナイ} であるか 〔本質〕 (the substance, i. e. the essence)	・「実体, ことに本 ^{ウーシア} 質 ^{ト・テイ・ユーン・エイナイ} 」または「本質としての〔本質の意味での〕実体」 ・「形相」 ・「定義」 ^{エイドス} ・「説明方式」 ^{ロゴス}
(7) 質料因	もの ^{ヒレー} の質料であり基 ^{ヒボクイメノン} 体 (the matter or substratum)	・「質料」または「物質」 ・「基 ^{もと} に置かれているもの, 基礎にあるもの」, 「主語」 ・事物の内在的構成要素

四原因説とは「存在者の生成や運動の「原因 (aitiā [αἰτία] ^{アイティアー} もしくは aition [αἰτίον] ^{アイティオン})」を説明するアリストテレスの学説²⁹⁾」である。その一つとして(6)

27) “εἶδος,” *Greek-English Lexicon with a Revised Supplement*, compiled by Henry George Liddell and Robert Scott, (Oxford: Clarendon Press, 1996).

28) 出『アリストテレス哲学入門』138. 参照。

29) 平田裕之「四原因説」『哲学キーワード事典』68.

「形相因」があり、「形相」(その物の種類を示すような形)がその内容として挙げられている。また Aristotle は、形相因を「物事の^{ウーシア}実体でありなにであるか〔本質〕」(31)と述べており、これは「本質としての〔本質の意味での〕実体」(320)、すなわち、表1(3)あるいは表2(5)で挙げた essence (本質)と解される^{ウーシア}οὐσία のことであり、「特定のある人間」などの「個体」の「なにであるか〔本質〕」を意味する。そして、「なにであるか〔本質〕」は、しばしばそれ(本質)を言い表すところの「^{ロゴス}説明方式」である「^ロ定義」と同一視され、さらには「その物の種類を示すような形」としての「^{エイドス}形相」とも同内容的であると捉えられている³⁰⁾。このように、形相因には、その内容として「本質としての〔本質の意味での〕実体」、「^{エイドス}形相」、「^ロ定義」、「^ゴ説明方式」といったものが含まれていると言える。

以上のことをまとめると、表5のようになる。まず、(8) substance (実体)とは「特定のある人間」などの「個体」(individual)を意味する。そして、(9)

表5 substance と essence の表す意味

	^{ウーシア} οὐσία	訳語	意味
(8)	substance	実体	個体 (individual)
(9)	essence	本質	種 (species) (類 (genus) を含意する) ³¹⁾ = ^{エイドス} 形相 [その物の種類を示すような形] (form) : 靈魂 [生命原理], 実体の諸部分 (面, 線, 数など), もののなにであるか [本質], 定義

30) 出注『形而上学 上』321. 参照。

31) 種が類を含意することについて、岩田圭一は次のように述べている。「実際に、Z 卷第十二章における形相の定義の一性に関する説明を見てみよう。それによると、類に関しては、「類は〔その〕類の〔種ないし形相〕としての種〔ないし形相〕から離れて端的に存在するのではない」、あるいは「〔類は〕存在するとしても質料として存在する」と言われ (Met. Z 12, 1038a5-6)、動物という類が人間という種ないし形相に含意されているということが示されている」岩田圭一『アリストテレスの存在論-〈実体〉とは何か-』早稲田大学学術叢書 38 (東京: 早稲田大学出版部, 2015) 172.

essence (本質) は, そういった「個体」が属する「種」(species) とその「類」(genus) を表すと同時に, 「その物の種類を示すような形」としての「形相」^{エイドス} (form) とも同内容的である。また, 表 2(5) に挙げたように, 靈魂 [生命原理] や, 実体の諸部分 (面, 線, 数など), ものなににであるか [本質], 定義といったものも, 「形相」^{エイドス} として扱われるため, essence (本質) の指示する内容と言える。

3. Milton の使用法

以上 Aristotle の用語の定義を見てきた。次に, Milton の使用法を見てみよう。substance と essence に関する Hunter の分析をまとめると, 表 6 のようになる。なお Hunter の説明は, 主に *Christian Doctrine* (1825) の, とりわけ三位一体論, および若干の *A Fuller Institution of the Art of Logic* (1672, 以下 *Art of Logic*) における使用に基づいたものであるが, 本稿では *Art of Logic* に焦点を当て, また *Lexicon* および *OED* と照合することで, *Paradise Lost* では, いかなる解釈が可能かについて考察する。

表 6 Milton の使用する substance と essence の意味

		Milton の使用する意味
(10)	substance	substratum [constituent matter ³²⁾] or stuff ³³⁾ / substratum を提供するもの ³⁴⁾
(11)	essence	first ousia [individual] ³⁵⁾

32) “Also available was a third conception of *ousia*, that of the Stoics. Originally it meant constituent matter, but in Christian thought it came to denote a substratum for any real being.” Hunter, 20.

33) “According to him [Milton], substance (*substantia*) is the substratum or stuff of God the Father which underlies the Son. It is not common to both but derives only from the Father.” Hunter, 15.

34) “Substance, rather, as we have seen, provides the substratum for these beings, not their separate existence.” Hunter, 16.

まず、(10) οὐσία^{ウーシアー}の主たる英訳であり、日本語では「実体」と訳される“substance”が[§]、“substratum or stuff”（基体ないし材料）の意味で用いられていることが挙げられる。Hunterによれば、“As for applied meanings, originally refers to the raw stuff or matter out of which an object is made—the substratum.”³⁵⁾つまり、そこから対象が作られるところの“stuff”（材料）や“matter”（質料）が[§] substratumであるが³⁷⁾これは表2(4)に挙げた*Metaphysics*における οὐσία [substance] の分類とほぼ重なる意味であり、*Lexicon* of the substance の定義“sb. (a) the material of which anything is made;”ともほぼ合致する³⁸⁾以上のことを、先述の“Or if our substance be indeed divine, / And cannot cease to be, we are at worst / On this side nothing. . .” (2. 99-101)に適用すると、ここでの“substance”は、「実体」と訳すことは可能だが、その意味するところは「個体」や「本質」ではなく、墮落天使達の身体を構成する「質料」ないし「基体」であると言える。

次に、οὐσία^{ウーシアー}の「本質」ないし「なにであるか〔本質〕」(τὸ τί ἦν εἶναι^{ト・ティ・エン・エイナイ})の意味的側面であった“essence” (表1(3))が、Miltonでは(11)「第一のウーシアー」すなわち「特定のある人間」などの「個体」(individual)の意味で用いられていることが挙げられており、これは本稿冒頭で挙げた*Lexicon*の“sb. (a) being that has existence, entity”^{ト・ティ・エン・エイナイ}と重なる意味である。τὸ τί ἦν εἶναι (ラテン語逐

35) “It can mean Aristotle’s first *ousia* or individual. In this sense Milton translated it as essence and applied it to the three persons of the Trinity to state their individual existence.” Hunter, 20.

36) Hunter, 21.

37) substratum は Aristotle の原語では ὑποκειμένον^{ヒュポケイメンオン} (表1(2))であり、その意味は「ある議論ないし理論において何かを述べたり規定したりするときにその前提とされているものであり、そのような意味で、「基に措かれている」当のもの」(中畑注90)であったが、例えば *Metaphysics* では、substratum が matter の意で用いられることもある「(1) 或る意味では、質料がそうした基体と言われ、(2) 他の意味では型式が、また(3) 或る意味では、これら両者から成るものがそれである」(230)。

38) なお、substance (ラテン語: substantia) の語源は οὐσία^{ウーシアー} であり、substratum (ラテン語: 同形) の語源は ὑποκειμένον^{ヒュポケイメンオン} である。しかし、このように語源は異なるものの、意味的には substantia (sub: 下に + sto: 立つ) と substratum (sub: 下に + sterno: 広がっている) といったように、極めて近い言葉である。山口14, 144. 参照。

語訳：quod quid erat esse) について言えば、Milton は *Art of Logic* において、次のように述べている。

Forma est causa per quam res est id quod est. Hæc definitio Platoniam & Aristotelicam conjunxit: ille enim definit formam esse causam per quam, hic, quod quid est esse.

‘*Form is the cause through which a thing is what it is.* This definition joins those of Plato and Aristotle. For Plato defines form as the cause through which, Aristotle as that which is [the what-is-being].’ (58-59)³⁹⁾

Milton は Aristotle の ト・ティ・エーン・エイナイ τὸ τί ἦν εἶναι に相当するラテン語 “quod quid est esse [the what-is-being]” を引き合いに出し、“form” (形相) とは、それを通して事物の quod quid est esse (なにであるか [本質]) を決める原因であると述べている。essence (本質) は Aristotle の存在論においては form (形相) の意味を持ち (表 5(9)), また「なにであるか [本質]」は「形相因」の一つとして数えられるため (表 4(6)), ここで Milton が quod quid est esse という言葉で essence, 特に the what it is (なにであるか) の意味での「本質」を指示していることは明白であると考えられる⁴⁰⁾ このように、Milton の用いる essence の意味を考える上で、

39) Allan H. Gilbert, ed. and trans., “A Fuller Institution of the Art of Logic,” *The Works of John Milton*, vol. 11 (New York: Columbia UP, 1935). 以降 *Art of Logic* からの引用は、原文および英訳を本書からおこない、英訳には ‘ ’ を付す。また必要に応じて次の英訳を角括弧で示す。Walter J. Ong, S. J. and Charles J. Ermatinger, ed. and trans., “A Fuller Course in the Art of Logic,” *Complete Prose Works of John Milton*, vol. 8 (New Haven: Yale UP, 1982).

40) Robert H. West によれば、Milton は essence が主とその form によって決定されることから、essence を form あるいは shape に置き換えることがあると指摘し、*Of Reformation* の例を挙げている。Robert H. West, “Metaphysics,” *A Milton Encyclopedia*, Vol. 5 (Lewisburg: Bucknell UP, 1979) 120. *Of Reformation* の原文は以下の通り。“they began to draw downe all the Divine intercoures, betwixt God, and the Soule, yea, the very shape of God himselfe, into an exterior, and bodily forme...” John Milton, “Of Reformation Touching Church-Discipline in England,” *The Works of John Milton*, vol. 3, part 1 (New York: Columbia UP, 1931) 2.

form (形相) が重要であることが窺い知れるが、その form については次のようにも述べられている。

Res etiam singulæ, sive individua, quæ vulgò vocant, singulas sibique proprias formas habent; different quippe numero inter se, quod nemo non fatetur. Quid autem, est aliud numero inter se, nisi singulas formis differre? Numerus enim, ut rectè *Scaliger*, est affectio essentiam consequens. Quæ igitur numero, essentiâ quoque different; & nequaquam numero, nisi essentiâ, different.

‘Single things, or what are commonly called individuals, have form single and proper to themselves; certainly they differ in number among themselves, as no one denies. But what is differing in number among themselves except differing in single forms? For number, as Scaliger rightly says, is an affection following an essence. Therefore things which differ in number also differ in essence; and never do they differ in number if not in essence.’ (58-59)

“Res . . . individua [individuals]” (個体) には, “singulas sibique proprias formas [form single and proper]” (単一の個別的な形相) があること, また数において異なるもの, つまり別の個体であるものは, “essentiâ [essence]” (本質) においても異なるということが述べられている。すなわち essence (なにであるか [本質]) が異なるということは, 別の個体であることと同等であるため, 必然的に各々の essence は各々の個体を指示することになるというのが Milton の意見であると考えられる。さらに, essence は次のように二つに区分されている。

Per quam res est id quod est; i. e. quæ dat proprium esse rei. Cùm enim cujusque ferè essentia partim sit communis, partim propria; communem materia constituit, forma propriam. Et per alias quidem causas esse res potest dici;

per solam formam esse id quod est.

‘Through which a thing is what it is: that is, which gives the peculiar essence of the thing [gives a thing its proper existence]. For when the essence of almost anything is partly common, partly proper, the matter constitutes what is common, the form what is proper [matter constitutes the common essence and form the proper]. And through other causes the thing can be said to be; through form alone to be *what it is*.’ (58-61)

ほとんどの事物の “essentia [essence]” は、部分的に普遍的で、部分的に個別的であり、“materia [matter]” (質料) が普遍的部分を、“forma [form]” (形相) が個別的部分を構成すると述べられている。つまり、「質料」を「普遍の本質」、
「形相」を「個別的本質」(なにであるか [本質]) と区分し、またこの二つを共に「本質」として扱っていることを意味している。

以上を踏まえ、*Lexicon* および *OED* の定義と照合してみよう。essence にはまず、“sb. (a) being that has existence, entity” (*Lexicon*), “2. a *concr.* Something that is; an existence, entity. Now restricted to spiritual or immaterial entities.” (*OED*), すなわち「～がある」を意味する existence に相当する使用方法がある。そしてこれは、Hunter の挙げる (11) first ousia (individuals) と同等であると言えるため、“heavenly essences” (1. 138) とは、特に「個別の本質」(なにであるか [本質]) に重きを置いた「天より落ちた、^{ウーシア} 個体としての各々の存在者 (墮天使) 達」, 例えば, Satan や Beelzebub といった「特定のある墮落天使」達を指すと解釈可能であると言える。また essence には、“(b) constituent substance” (*Lexicon*), “2. c. ‘Constituent substance’ (J).” (*OED*) という構造要素としての物質, 材質, 材料の意味がある。Hunter によれば, ストア学派は οὐσία を constituent matter の意味で用いていたが, これがキリスト教の思想では, あらゆる存在にとっての substratum を意味するようになり, Milton はこれを substance と訳し, 神から派生した common substratum を支持するために用いたという⁴¹⁾ つまり, 表6

(10)に示した *substance = substratum* [constituent matter] に相当する意味であるが、実質的には、Milton 自身が述べるところの、個体が持つ「普遍的本質」を構成する「質料」に相当すると考えられる。従って、“so soft / And uncompounded is their essence pure. . . .” (1. 424-45) や “Our purer essence” (2. 215), そして “[I . . . am now constrained / Into a beast, and mixed with bestial slime, /] This essence to incarnate and imbrute. . . .” (9. 166) といった記述は、「特定のある墮落天使」達を構成する、天使という種に共通した普遍的な質料についての記述であると言える。

最後に、本稿冒頭で挙げたもう一つの引用について考えてみたい。

What fear we then? what doubt we to incense
 His utmost ire? which to the height enraged,
 Will either quite consume us, and reduce
 To nothing this essential, happier far
 Than miserable to have eternal being:
 Or if our substance be indeed divine,
 And cannot cease to be, we are at worst
 On this side nothing. . . . (2. 94-101)

まず、“essential” (= essence) を普遍的本質としての「質料」と解釈すると、ここで Beelzebub は、墮落天使達を構成する普遍的な essence (質料) が、神の怒りによって無へと還元される (“reduce / To nothing”) のであれば、永遠に不幸な状態であるよりも幸福であると述べていることになる。なお Adam は後に “As my will / Concurred not to my being, it were but right / And equal to reduce me to my dust. . . .” (10. 746-48), つまり自身が塵へと戻るのとは正しく公正である

41) 注33 参照のこと。

と述べているが, “dust” (塵) は Adam が形作られたところの「質料」にあたるため, 両方の台詞の類似性から見ても, ここでの essence が「質料」を意味すると考えるのは難しくない。そして, “substance” を先述の通り substratum (基体ないし質料) と解釈すると, substance (基体ないし質料) が, (神から与えられたが故に) 神聖であるとすれば, その「基体ないし質料」は無に帰することはない, と続けていることになる。

4. お わ り に

本稿では, *Paradise Lost* における存在論の一端を担う essence という言葉を, Milton がどのような意味で使用しているかについて考察した。以下に本稿をまとめ, 結びとする。

まず, essence および substance 両語のギリシア語源である οὐσία^{ウーシア} が, ラテン語, 英語を経て日本語ではどのように訳されるかを確認した。訳としては,
 ① οὐσία^{ウーシア} そのものは, substantia から substance を経て「実体」と訳されるが,
 ② οὐσία^{ウーシア} が特に ὑποκειμενον^{ヒュボケイメノン} を指す場合には, substratum / subiectum を経て substratum / subject (基体/主語) と訳され, また ③ οὐσία^{ウーシア} が τὸ τί ἦν εἶναι^{ト・ティ・エーン・エイナイ} を指示する場合は, essentia から essence を経て「本質」, もしくは τὸ τί ἦν εἶναι^{ト・ティ・エーン・エイナイ} のラテン語逐語訳である quod quid erat esse を経て, 英語では what to be what it was, 日本語では「なにであるか [本質]」と訳されることを確認した。意味については, ① οὐσία^{ウーシア} (substance, 実体) が, ② substratum (基体) すなわち「個体」を意味する場合と, ③ essence (本質/なにであるか [本質]) を意味する場合の二つに分類され, また ③ essence は, εἶδος^{エイドス} (その物の種類を示すような形: 形相) と同内容的であることを確認した。次に, これら substance と essence の指示する意味を踏まえ, Hunter の提示する Milton の用法を軸に, *Art of Logic* における Milton 自身の記述と *Lexicon* および *OED* の定義を照らし合わせ, *Paradise Lost* における substance と essence それぞれの意味を考察した。

まず, Hunter によれば, Milton は substance を substratum(基体), あるいは stuff (材料) の意味で用いており, これは, 表2に示した substratum を意味する場合の substance とほぼ同じ使用法である。またこれは *Lexicon* および *OED* の定義とも重なるため, *Paradise Lost* に適用可能, かつ意味的にも違和感はないことが分かった。次に essence に関して, Hunter によれば, 一般に「本質, なにであるか〔本質〕」を意味する essence を, Milton は *Categories* における「第一のウーシアア」すなわち「個体」の意味で用いており, これは一般的な essence の解釈とは異なるものの, *Art of Logic* における「個体」が持つ “*proprias formas*” (個別的形相) についての論理を適用すれば, *Lexicon* および *OED* の定義とほぼ重なるため, *Paradise Lost* に適用可能, かつ意味的にも違和感はないことが分かった。さらに, *Lexicon* と *OED* が示す essence のもう一つの定義である “*constituent substance*”, つまり構造要素としての物質, 材質, 材料などの意味についても, Milton の「普遍的本質」としての「質料」の論理を適用することで解釈可能であることが分かった。

以上のことから, Milton による essence の使用法について, それが① Hunter の指摘する「第一のウーシアア」, つまり「個体」の意味で用いられる場合は, 別の個体であるが故にその「なにであるか〔本質〕」をも同時に表しているということ, そして②「普遍的本質」としての「質料」の意味で用いられる場合があるということが分かった。また, ①の使用法は「個体としてある」と同時に「なにであるか〔本質〕」を表すラテン語初期の訳語 *essentia* と同様の使い方であり, その一方で②個体の普遍的な「質料」, つまり「基体」をも表現可能としていることから, Milton の essence の使用法は, ラテン語初期の訳語である *essentia* をさらに遡り, 正しくその語源である Aristotle の用いた ^{ウーシアア}*οὐσία* の本来の意味を理解した使い方であると結論づける。

※ 本稿は, 2020年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。